慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	<論文>織物問屋群生の史的背景と特徴 : 明治・ 大正期の人形町通り界隈
Sub Title	Historical Background of Textile Wholesale Business Street in Nihonbashi : Meiji to Taisho Age
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	2003
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.46, No.2 (2003. 6) ,p.89-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20030600-00498891

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第46巻第2号
2003年6月

2003年6月2日掲載承認

織物問屋群生の史的背景と特徴

――明治・大正期の人形町通り界隈――

白石　孝

<要　約>

日本橋人形町通り界隈は，明治期から様々な織物問屋が群生し，今日に及ぶ。本稿はこの織物問屋街の形成の史的な特徴を分析する。明治33年と大正7年のこの界隈の町々における織物問屋の群生を比較し，その歴史的背景を探る。殊に「問屋が問屋を生む」（問屋からの枝分れ）の実態を詳述する。更に，大正期の黄金時代から反動不況・関東大震災・昭和期に至る時代の織物問屋の姿を，開店の時期，出身地，売上規模などから分析して，その特徴をみ，明治末期から顕在化した問屋の基盤の変化を考える。特に関東・関西の生産を対比しつつ，綿織物金巾と毛織物モスリンについて，問屋の生産会社へのかかわりあいの違いを明らかにし，関東大震災後のこの界隈における織物問屋街への京都・大阪の問屋や産地問屋の東京進出を記すものである。

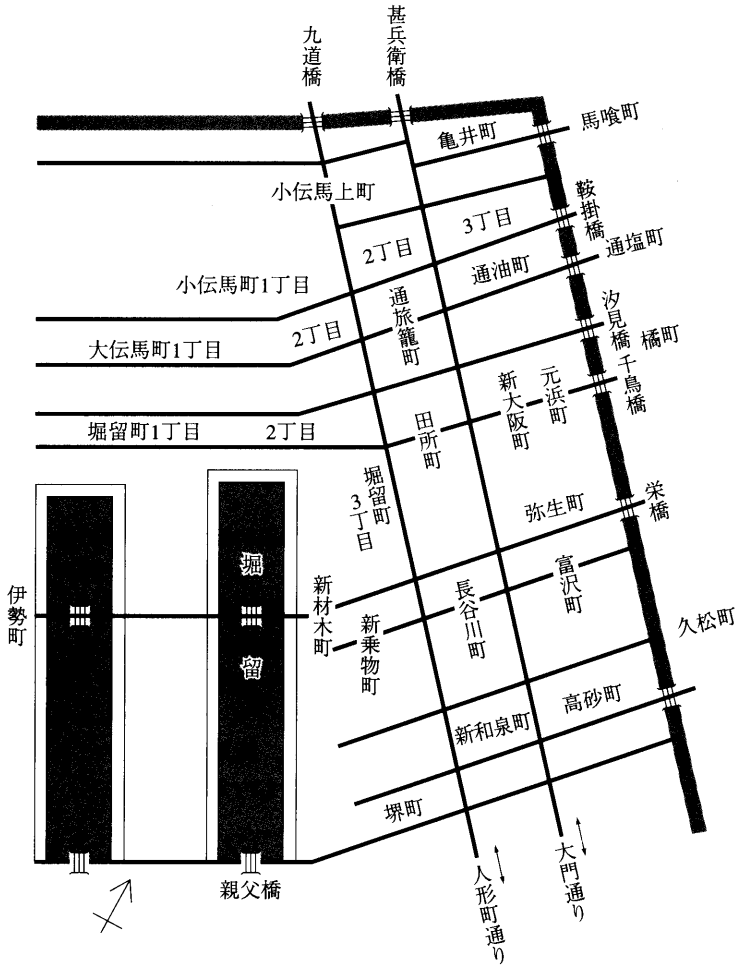
<キーワード>

織物問屋の群生，織物問屋街化，新規市場参入，市場細分化，賃織工場，賃染工場，商標取引，分割市場，東京裏地問屋，枝分れ，暖簾継承，ブローカー，廃業・転業，商品相場，黄金時代，反動不況，関東大震災，開店年次推移，年商，同郷同業者の町，関東・関西，紋織，羽二重，縮緬，白木綿，銘仙，縞紬，金巾，モスリン，大阪紡績，東京紡，東京キャラコ，モスリン友禅，東京モスリン紡績，モスリン織物工場・染工場，国内志向型商品，輸出ドライブ，特約店契約，栗原紡績，モスリン仲間八家，日本毛織，毛斯綸紡織，東洋モスリン，江戸積み，委託販売制度，大阪問屋・産地問屋の進出

はしがき

本稿は明治から昭和前期における人形町通り界隈の織物問屋街の形成とその史的特徴を記すものである。この界隈が明治に織物問屋が群生し，その問屋街を形成していったことについては，すでに筆者がこれまでの著書，『日本橋堀留・東京織物問屋史考』，や『江戸明治大正・日本橋界隈の問屋と街』及び『日本橋街並み商業史』で記したし，洋反物については，国産化との関連を中心に『輸入代替工業化の史的事例研究――明治・大正期のモスリン産業（『駿河台経済論集』5－2）や

図1　明治44年頃の町名・通り略図



「明治期の洋反物輸入と東京織物問屋――時代と商人の経営史」（『慶應経営論集』14－1）で取り上げたが，この界隈の織物問屋街の形成とその史的特徴を中心としたものではなかった。それに，明治期のこれまでの分析は，どちらかというと，繊維産業の近代化が主題であり，いわんや，織物問屋にしても，本稿のように特定の地域のそれを分析したものは稀有であったといえる。

もちろん，ここに取り上げる地域は，図1にあるように，日本橋人形町通りや大門通りの両側の町々で，北は小伝馬町から南は現在の人形町交差点辺りまでの界隈であり，旧町名の大伝馬町2丁目，通旅籠町，通油町，堀留町1・2・3丁目，田所町，新大坂町，元浜町，新材木町，新乗物町，長谷川町，弥生町，富沢町，新和泉町，高砂町，堺町，葺屋町の18の町々，これにこの界隈の周辺での芳町，浪花町，橘町1・2・3・4丁目，村松町，久松町，浜町1・2・3丁目の11ヶ町を加える。以下の記述で「この界隈」というのも，これらの町々から成る地域を指すことを前もってお断りしておきたい。また，この分析は，資料的に明治・大正・昭和の三つの時代にまたがるため，後半で

は町の区分が，震災後の区画整理による新町名にもとづくので，改めてその箇所で，新旧町名を記すことにした。

1. 織物問屋の群生の背景

まず，この界隈がいかに明治に織物問屋街化したかということは，筆者が前述のような論著でも度々記してきたところだが，改めてここで明治33年と大正７年の各町の織物問屋の数をみると，表１のようである。その脚注にあるように，これは，明治33年については『日本商工営業録』より，また大正７年については『日本各種営業者姓名録』より，織物の卸商とあるものを抽出した店数である。これによると，明治33年には，すでにこの界隈（表１のA）には194店を数えている。なかでも，明治になって商業地として注目されるようになった田所町・長谷川町・富沢町辺りには，その半数近い94店が店をかまえたのであった。また周辺の町（表１のB）でも43店にのぼるが，その大部分は橘町１・２丁目と久松町であり，これらの町が織物問屋街の一部に組入れられていったことを物語る。[1] この明治期後半の織物問屋街化は，更に大正にかけて進展をみせる。表の大正７年の街並みを見ても，界隈Ａの町々の問屋の合計は30店増えて224店にもなり，通旅籠町や元浜町，新材木町，堺町に増加が新しく拡がってゆくのであった。一方，周辺Ｂの方は，橘町へのこうした傾向は一段落し，その代り，久松町に著しい増加をみる。まさにそこは富沢町の織物問屋街の延長といっても過言ではない。また，浜町２丁目にも８店できるが，それはこの辺りが商業地として遅れて開発されていった結果でもあった。[2]

それでは，こうしたこの界隈の織物問屋の群生には，どのような時代の背景が考えられるであろうか。

まず第１は，これはなにもこの界隈の織物問屋に限った背景ではないが，江戸時代と違って，独占的な問屋仲間があるわけではなく，市場取引の自由化が進んだことがあげられる。これは業者の新規市場参入を容易にするものであったことはいうまでもない。

第２は，この界隈のロケーションにかかわる変化である。江戸時代は人形町通りの南は入堀に囲まれた武家屋敷地で，茅場町・八丁堀・築地には思案橋から小舟町に出るか，小網町から鎧の渡しを渡るかしか方法がなく，本町通りからすれば人形町通りは横道で，この界隈は商業地としては三流と評されていたものが，明治になって上記の武家地は商業地になり，鎧橋ができ，そこに水天宮を中心とする東京屈指の繁華街が生れてくるに及んで，人形町通り界隈は一流の商業地に変貌するのであった。これにともない，本町通りと人形町通りの交差する辺りの町々から，南へと商業地が

1)　白石孝「日本橋橘町商業史覚書」(『三田商学研究』41—6)，「日本橋村松町・久松町商業史覚書」(同43—2)。
2)　白石孝「日本橋浜町２・３丁目商業史覚書」(『三田商学研究』43—5)。

表1　明治・大正期の町別織物問屋数

町　名	明治33年	大正7年	増減	町　名	明治33年	大正7年	増減
A				富沢町	35	29	−6
小伝馬町1丁目	0	0	0	新和泉町	2	5	+3
2丁目	0	0	0	高砂町	2	6	+4
3丁目	2	1	−1	堺町	3	11	+8
大伝馬町2丁目	6	6	0	葺屋町	4	6	+2
通旅籠町	9	16	+7	A小計	194	224	+30
通油町	16	12	−4	B			
堀留町1丁目	0	5	+5	芳町	0	1	+1
2丁目	9	5	−4	浪花町	0	1	+1
3丁目	0	5	+5	橘町1丁目	13	13	0
田所町	24	18	−6	2丁目	9	10	+1
新大坂町	16	11	−5	3丁目	2	3	+1
元浜町	12	24	+12	4丁目	0	1	+1
新材木町	8	15	+7	村松町	4	6	+2
新乗物町	7	6	−1	久松町	13	24	+11
長谷川町	35	35	0	浜町1丁目	1	2	+1
弥生町	4	8	+4	2丁目	0	8	+8
				3丁目	1	1	0
				B小計	43	70	+27

明治33年＝『日本商工営業録』，大正7年＝『日本各種営業者姓名録』

拡大してゆく。表1の織物問屋の明治33年における町分布はこれをよく示しているといえるであろう。しかし，これも織物問屋の群生に限らぬ一般的な背景にすぎないかも知れない。

第3は，まさに織物問屋の群生そのものに関する特徴的な背景でもあるが，織物の多種・多様化があげられよう。織物というものは，本来，その糸の種類，染めや織り方，柄，産地などから実に多種にわたっており，それだけにこれを取り扱う問屋も細分化されているが，明治になって，更に「舶来物」の多様な織物が増えるに至った。後述する綿布の金巾，モスリン・羅紗などの毛織物が登場し，その需要が拡大したからである。

第4はこれと関連するが，織物の消費市場が大衆化し，地方消費も拡大してゆくことにより，大衆向けの織物市場の厚味を増すに至ったことがあげられよう。これは流通段階における問屋の基盤を一層強固にするものであると共に，市場参入の間口を拡げるものであったといってよい。

第5は，織物について，大小様々な加工工場が設立され，問屋はこうした賃織工場・賃染工場をもつことにより，独特の商品を製出することができた。昭和6年には，東京にこうした賃染業者は65名にのぼる[3]。事実，東京裏地として全国に知られ，数多くの問屋が扱うようになったものも，

3)　大東亜繊維研究会編『日本染織工業発展史』p.107。

表2　東京裏地問屋商標（昭和6年）

所在地	店　名	商　標	所在地	店　名	商　標
田所町	市田商店東京店	江戸自慢	堀留町	前川太郎兵衛商店	おかめ, おふく, 梅之香, 羽子板, 初音
〃	澤井藤助商店	義家印	新大坂町	井田長商店	鶴亀
〃	樋口春吉商店	助六	弥生町	中村合名	業平
富沢町	今井商店	すみだ川, 染七, 福神	長谷川町	高橋太郎吉商店	暫, 美咲, 宮戸川
〃	岡正商店	胡蝶印	元浜町	外山弥助商店	葵印
〃	中重商店	花見印, 菊世界	堺町	天野半七商店	千万喜, 三勝染
〃	山中忠商店	龍宮染印	新和泉町	石川商店（柏吉）	辨慶
〃	稲村源助商店	金稲	久松町	西彦商事	まとひ印
新材木町	筈見善内商店	浦里	橘町	坊野商店	桜印
〃	丸久合名	誉の花色, 鳴響太鼓印	〃	斎藤甚八商店	吉備公
〃	山西商店	江戸芝居印, 東京別染			
堀留町	奥井武左衛門商店	桜姫			

『日本染織工業発達史』p.95より抽出作成

「商標取引」といって問屋が意匠を考案し，独自の商標のものを賃染工場で染めて販売していた。表2はこの界隈の代表的な問屋の商標である。もちろんこれらの問屋は呉服であったり，太物，綿布，また，なかには金巾という洋織物の店であるが，これ以外にも，こうした裏地を専門に扱う問屋も数多くあった。まさにこの例でみるように織物は分割市場でもあったといえる。それだけに問屋が群生する十分な土壌があったといえる。

第6は，この群生した問屋そのものの特徴である。織物というものの性質上，これを商う業者には，かなりの経験が必要となる。実際，この界隈の問屋について店主の経歴をみると，他の店に相当の年月勤めた後，独立して開業したものが多い。表3は，この界隈における問屋の店主のこのような経歴を示すものである。この表のaには，この界隈の大店として知られるところに勤め，これからこの界隈に独立して店を持つようになったものが複数みうけられた店主名と，更にこれから店を持つに至ったものを記し，bではそれ以外の主家から独立して枝分れした店をかかげておいた。これでみると，問屋というものがいかに枝分れして次から次に生れていったかをうかがい知ることができよう。筆者がかつて「問屋が問屋を生む」とその特徴を表現したことがあるが[4]，これこそ，この界隈における織物問屋群生の実態といってよかろう。もちろん，なかには主家からの独立についての経緯は様々であるが，ここでは特に2つの種類のものを記しておきたい。それは主家が閉店もしくは廃業により，ここに勤務していた店員がその暖簾を継承するといったケースで，表4－aにこの例をかかげておいた。またもう1つは主家が閉店や廃業，縮小をしたために，独立して新たな店を自分が持つといったケースで表4－bのような例である。

もっとも，主家から独立しても，すぐに問屋を開業するとは限らない。久松町で大正2年に中形

4)　白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』三―1。

表3－a　主家より独立開業店主（界隈のみ）

- 市田東京店（堀留町）
  - 畑瀧蔵（堀留町）
  - 猪田喜三郎（橘町）
  - 神野清五郎（富沢町）
  - 八木増次郎（　〃　）
- 小林吟右衛門（堀留町）
  - 沢田政七（堀留町）
  - 杉村甚兵衛（堀留町）
    - 浜村理三郎（富沢町）
    - 伊勢屋彦三郎（小伝馬町）
  - 薩摩治兵衛（田所町）
    - 藤野茂八（大伝馬町）
    - 大岡信三郎（久松町）
- 田中源治（長谷川町）
  - 中川平七（富沢町）
    - 瀧富太郎（大伝馬町）――滝與三吉（富沢町）
    - 大辻松吉（富沢町）
    - 辻吉三郎（　〃　）
    - 桂田伝次郎（　〃　）
    - 塚本三蔵（　〃　）
    - 北村謙蔵（大伝馬町）
  - 生島十男吉（浜町）
  - 福島多一郎（長谷川町）
- 牧田源太郎（新乗物町）
  - 川上弥三郎（堀留町）
  - 山下庄之助（　〃　）
- 石田万兵衛（通油町）
  - 田中市良（堀留町）
  - 山岸幸七（大伝馬町）
- 澤井藤助（堀留町）
  - 石田喜作（堀留町）
  - 西谷寅蔵（　〃　）
- 青木五兵衛（堀留町）
  - 倉科勇蔵（堀留町）
  - 大垣愨一（人形町）
- 岡田正次郎（富沢町）
  - 井田長治（新大坂町）――山田幾太郎（堀留町）
  - 澤田小平（堀留町）
- 井上市兵衛（富沢町）
  - 瀧川忠次郎（久松町）
  - 坂田弥之助（大伝馬町）
- 堀口平助（弥生町）
  - 門田嘉右衛門（大伝馬町）
    - 星野清一郎（富沢町）
    - 山本元三郎（堀留町）
- 斎藤嘉吉（富沢町）
  - 安藤荘一郎（堀留町）――西村永一（大伝馬町）
- 西川幸兵衛（堺町）
  - 苗村恒介（富沢町）
  - 野崎健治（堀留町）
  - 久保熊次郎（　〃　）
- 島田新右衛門（弥生町）
  - 田中泰蔵（富沢町）
  - 中野弥一（久松町）
- 中井長兵衛（大伝馬町）
  - 大前増造（富沢町）
  - 吉田哲二（　〃　）
  - 松居久左衛門（堀留町）――河村道之助（田所町）

表3－b　主家より独立開業店主（界隈のみ）

主家店名	独立開業店主	主家店名	独立開業店主
石田万吉（新大坂町）	山田長三郎（堀留町）	深田與三兵衛（富沢町）	瀧停三（浜町）
辻新兵衛（通油町）	伊藤平三郎（橘町）	斎藤藤太（橘町）	高橋央（橘町）
大橋長次郎（小伝馬町）	山本與惣吉（小伝馬町）	櫻井半六（田所町）	野村幸助（橘町）
大橋藤八（富沢町）	石原政治（大伝馬町）	佐久間喜七（新大坂町）	高橋太郎（堀留町）
瀧川儀兵衛（長谷川町）	伴野清之助（堀留町）	西村嘉右衛門（通油町）	黒川伝（堀留町）
堀越常七（富沢町）	奥田幸三郎（富沢町）	稲村源助（富沢町）	塚本眞浩（村松町）
菅沼保義（橘町）	北原清忠（堀留町）	岩崎次三郎（富沢町）	中彬擧蔵（堀留町）
横田利吉（新材木町）	大林庄内（久松町）	松坂吉（通旅籠町）	中井喜一郎（堀留町）
石井清兵衛（橘町）	大久保久七（富沢町）	小松太助（富沢町）	西村次郎吉（堀留町）
柴田源七（葺屋町）	奥田徳三郎（蠣殻町）	前川太郎兵衛（堀留町）	岩佐捨蔵（芳町）
中村磯八（橘町）	矢島平吉（富沢町）		
市田惣右衛門（橘町）	奥川余之助（堀留町）		
園田小平（堀留町）	和田聰二（堀留町）		
家島常七（長谷川町）	笠島秋治（芳町）		
市田文次郎（堀留町）	川崎寅蔵（蠣殻町）		
川村千代吉（芳町）	川原崎増造（久松町）		
川島斎兵衛（堀留町）	川端捨次郎（堀留町）		

表4－a　主家閉業暖簾継承

所在地	閉業主家店		暖簾継承者店	
	扱い品	店主名	継承年次	店主名
富沢町22	各地織物	杉崎伊兵衛店	——	浜田四郎吉
〃　7	綿布金巾	門田喜右衛門	明治37年	星野清一郎
堀留町2	呉服	島津吉兵衛	昭和2年	丹下徳次郎
人形町3－1	モスリン人絹	東洋紡織出張所	大正12年	西堀宗治郎
大伝馬町2－1	洋反物	堀越角次郎	明治30年	堀越勘治

表4－b　主家閉業・縮小による独立開業

閉業・廃業・縮小主家商店			主家より独立開業店			
所在地	扱い品	商店名	所在地	開業年次	扱い品	店（主）名
千葉	呉服	丸三商店廃業	堀留町1－10	明治39年	呉服	石木貞一
富沢町	〃	大橋商店　〃	大伝馬町2－3	昭和9年	白生地	石原政治
本町	綿布	柏原商店　〃	堀留町2－4	大正4年	木綿金巾	徳永四郎
富沢町	洋織物	井上市兵衛閉店	久松町14	〃　〃	〃	瀧川忠次郎
小伝馬町	——	大橋長次郎廃業	小伝馬町3－7	——	綿布	山本與惣吉
富沢町	呉服太物	堀越常七閉店	富沢町10	——	モスリン	奥田幸三郎
田所町	洋織物	山崎作次郎廃業	小伝馬町2－4	——	広巾綿布	佐藤延次郎
〃	〃	〃　〃	富沢町22	昭和8年	〃	斉藤要助
富沢町	〃	井上市兵衛閉店	大伝馬町2－6	——	〃	坂田源之助
橘町	綿布	菅沼保義　〃	堀留町1－14	昭和6年	綿布	北原清忠

昭和10年『紡織問屋要鑑』より作成

裏地綿布問屋を開業した大熊吉松も，村松町の山口商会に勤めた後，しばらくブローカーをしていたし，同じ町でやはり大正２年に広巾綿布問屋を開いた奥住市太郎も，モスリン問屋八家といわれた山崎作次郎店に奉公していたが独立，これもブローカーの後の開業であった。こうした例は，富沢町の田中泰蔵，堀留町１丁目の山下庄之助にもみられるところであった。

2. 織物問屋街の諸特徴

ここで，この界隈に群生した織物問屋の実態を更に検討してゆきたいと思う。

すでに表１に示したように，この界隈だけでも，織物問屋の数は，明治33年に237店，大正７年には294店にものぼっていた。それは，この業界が明治30年代から新たな成長期をむかえていたことを示すものであったが，同時にこれは廃業・転業・移転・開業のめまぐるしい変化を伴うものであった。筆者もかつてこの界隈の織物問屋を明治27年の『東京営業録』と大正８年の『東京商工信用録』とにより，この間にどれだけの店が姿を変え，あるいは消したかをみたことがあるが，実にこれに該当するものは126 店舗にも達していた。[5] それでも大正８年までは増勢の一途をたどる。しかし，大正９年の大戦の反動不況により事態は急変する。織物問屋にとって商いを左右する商品相場は，大正10年，11年と急落をみせるのであった。表５は大正３年から大正11年までの金巾，晒木綿，モスリン生地，羅紗，着尺セル，羽二重，京染裏地消，白縮緬などの高値Ｈと安値Ｌの相場の推移である。大正８年から９年にかけては，いずれの商品の相場も急騰し，まさに織物問屋にとっては黄金時代の到来であった。それだけに，後述のように，この界隈でも問屋の数も増加する。しかし，翌10年，11年には相場は約半値近くまで下落し，激しい反動不況に突入するに至る。業界苦難の時期であった。そして，この傷跡もまだ癒えぬうちに，大正12年９月，関東大震災により日本橋は灰燼に帰し，業界は未曽有の危機をむかえる。特に，東京における多くの紡織，染工場などの消失は，この界隈の問屋にとって致命的な打撃であったといってよい。これにより，この界隈の織物問屋は大きく変貌をとげる。

以下はこうした時代の変化をふまえた上でのこの界隈の織物問屋の実態と特徴である。

資料としては，昭和10年の『紡織問屋要鑑』をベースとするが，抽出したものは，すでに表１にも記したような本稿の対象地域の織物問屋（風呂敷や帯地などを除く）である。これによると，昭和10年現在の該当する問屋はこの界隈で240店である。ただ，周知のように，関東大震災後の区画整理で，町名は昭和７年に大幅に変更になっているので，直接，町毎に明治・大正期のそれと比較することはむずかしい。そこで以下の分析表における町名を，それ以前のものとおおざっぱに対比したものを表６にかかげておこう。

---

5) 白石孝『江戸明治大正史・日本橋界隈の問屋と街』表５－９。

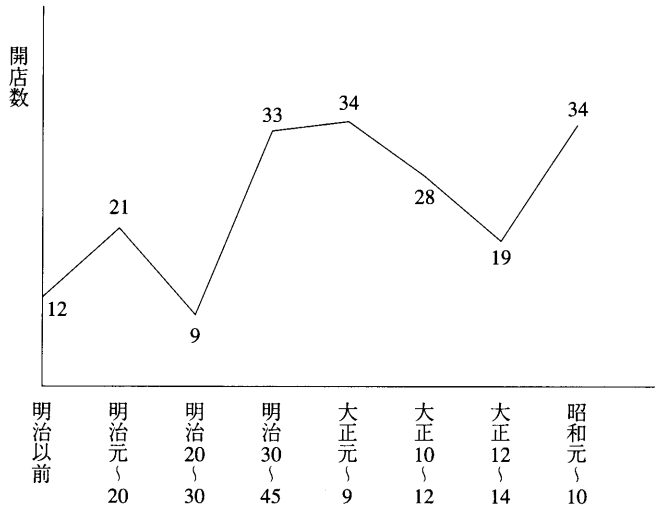
表5　大戦前後の諸品相場表（円）　（東洋経済新報社毎月末調査）

		大正3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年
金巾 千鳥一反	H	5.900	6.100	8.900	15.500	19.800	23.000	24.500	12.900	12.000
	L	5.450	5.200	6.500	8.100	14.200	15.000	9.750	9.000	9.000
木綿 晒木綿二等	H	.560	.490	.770	1.800	1.700	1.740	1.590	.840	.730
	L	.440	.385	.490	.700	1.050	1.040	.820	.600	.590
モスリン 生地上二尺巾二四ヤード	H	7.800	10.300	13.600	22.000	21.900	39.500	43.600	29.100	22.200
	L	7.500	7.300	11.200	12.300	18.300	21.800	23.500	23.200	20.400
羅紗 冬物無地中等一ヤード	H	1.575	1.900	2.850	4.000	4.900	7.500	9.500	5.750	4.200
	L	1.450	1.550	2.200	2.750	3.900	3.900	5.750	4.200	3.250
ネル 着尺巾一ヤード	H	.660	.700	.880	1.600	1.700	2.400	3.500	2.600	2.450
	L	.654	.650	.850	1.050	1.500	2.050	2.300	2.300	1.750
羽二重 福井尺五	H	9.150	7.950	12.000	14.100	17.200	30.000	32.500	17.300	18.300
	L	7.100	7.000	8.700	9.700	14.000	12.600	12.500	11.900	14.900
裏地絹 京染花色一匹	H	8.600	9.000	10.800	12.500	14.000	23.000	25.000	22.000	20.000
	L	7.900	7.800	9.400	10.300	12.000	12.400	15.500	16.500	18.000
絹布 白縮緬小巾上糸	H	10.200	9.800	10.800	13.500	10.500	31.000	34.000	23.500	23.500
	L	8.700	8.600	9.800	10.500	12.500	18.000	18.000	20.500	19.000

表6　関東大震災後の区画整理による新旧町名対比表

昭和7年以後の町名	←区画整理前　明治・大正期町名
小伝馬町	小伝馬町1・2・3丁目及び大伝馬町2丁目の一部
大伝馬町	大伝馬町2丁目・通旅籠町・元浜町の各一部と通油町
堀留町	堀留町2・3丁目，新材木町・新乗物町，通旅籠町・葺屋町の一部が1丁目，長谷川町・高砂町が2丁目
富沢町	弥生町・新大坂町・富沢町・高砂町
芳町	芳町・元大坂町・葺屋町・堺町の一部
人形町	新和泉町，住吉町，及び芳町・元大坂町・蠣殻町2丁目

図2　界隈の織物問屋開業年次の推移



数字は期間中に開業した店数
『紡織問屋要鑑』より作成

まず，この240店のうち，開店年次のわかっているもの190店をみると，明治前の開店は12店，明治期のものが63店，大正期81店，昭和期（10年まで）が34店である。もちろん，一方ですでに記した事例のように，閉店，廃業，転業のような店がかなりの数にのぼったことは前述したとおりだが，この界隈における織物問屋町が持続してきたのは，こうした問屋の絶え間ない開店によるものであった。しかし，期間別にみると，やはり，そこに特徴がみいだされよう。図2は，明治以前，明治前期（元年～20），明治中期（20～30年），明治後期（30～45年），それに大正期を大戦ブームまで（元年～9年）と反動不況・関東大震災まで（10～12年），この二重ショックで萎縮した時期（13～14年），それから昭和10年までの8つの時期に分けた開店数グラフである。もちろん，これは昭和10年における問屋の開店数であって，それまでに閉店してしまったものは含まれていない。したがって，実際の開店総数ではないが，そこには，すでに述べた業界の盛衰状況がよく示されているとい

表７　明治以前開業12店（昭和10年現在営業）

店（主）名	所在地	扱い品	年商	創業
奥田藤八	橘町10	絹布・綿布	50万円	元禄
外山弥助	富沢町５	各種織物	400	享保
岩崎次郎（近与）	〃　８	洋反物	300	文化
田中斎（田端屋）	〃　７	綿布	350	寛永
中村英太郎（中合）	〃　１	〃	70	天保
深田與三兵衛	〃　10	京呉服	130	嘉永
西沢善三郎	堀留町１－３	木綿金巾	25	嘉永
杉村友三郎	〃　１－９	モスリン	475	弘化
小林吟右衛門（丁吟）	〃　１－13	各種綿布	350	安政
山下忠七郎（亀忠）	〃　２－８	各地織物	130	嘉永
（長谷川治郎兵衛）	本町３	綿布	600	寛永
（久保田惣右衛門）	小舟町	関東織物	600	嘉永

（　）内は本稿対象の界隈外のもの

える。それにしても，昭和10年時点で，明治以前に開店したものが12店もあるが，これをみると表７のようである。この表の店(主)名，所在地，扱い品，年商はもちろん昭和10年時のものである。また，この界隈に属さぬ当時の織物問屋の２つの大店を参考までに下欄に記しておいた。しかし，こうした老舗も，大戦反動不況―関東大震災―世界恐慌などの激変する時代に，商勢はおろか暖簾を維持することは決して容易なことではなかった。この表にある京呉服の老舗深田興三兵衛店も実際は昭和５年には整理のやむなきに至り，債務を株式に振替えた新会社で漸く営業を継承しているからである。このときの営業報告には，

「震災直後１ヶ年間の復興景気解消後は連年打続く不況に累せられ業績更らに挙らず其間に於て一旦約束せる震災負債返済を実行完了したる為両々相俟って金配上に日夜苦慮する而已にして唯当面の糊塗に扱々として瀕死の状態に喘きつつ持続せしも年末に至り取引先関係の信用に破綻を来たし遂に整理発表止むなきに至れり，茲に祖先創業以来80年に近き歴史に一大汚点を印したるは承継たる自分として何を以てか祖先に見えん[6]」

とある。まさに当時の織物問屋の実情を物語るものであろう。

それにしても，入れ替わりの激しいこの界隈の織物問屋には，依然として近江出身者の店が多い。筆者もかつて江戸・明治・大正史として『日本橋界隈の問屋と街』を記した折，織物問屋の群生の背景に，堀留町界隈のこうした店を抽出し紹介したことがあるが[7]，これについては，松井清氏の「同郷同業者の町」の社会学的な論文と，やはり本稿と同じ『紡織問屋要鑑』などをベースとして

6)　深田与三兵衛『営業報告――明治・大正・昭和の呉服経営実録譜』p.302。
7)　白石孝，前掲書（注５）pp.103-108，及び同書表４－２。

表8　界隈の近江出身織物問屋（創業・開業者の出身地）昭和10年現在

市田弥三郎	堀留町	織物
市田文次郎	〃	呉服
石田喜作	〃	洋反物
西村次郎吉	〃	中形裏地
西沢善三郎	〃	木綿金巾
外村弥治右衛	〃	綿布
川島斎兵衛	〃	木綿金巾
川端捨二郎	〃	綿布
田中新左衛門	〃	京呉服
丹下徳次郎	〃	呉服
中井喜一郎	〃	モスリン
中彬擧蔵	〃	〃
前川太郎兵衛	〃	綿布金巾
増田善兵衛	〃	呉服
藤井彦四郎	〃	絹毛糸紡
小泉覚次郎	〃	綿布
青山末吉	〃	関東織物
澤田政七	〃	中形裏地
山本元三郎	〃	綿布
星久東京店	〃	染呉服
小林吟右衛門	〃	綿布
太田治三郎	〃	呉服
神野新平	〃	関東織物
稲本利右衛門	〃	各種織物
奥川金之助	〃	中形裏地
澤井藤助	〃	モスリン
篠村金治郎	〃	呉服
柚口定吉	堀留町	京呉服
吉田梅次郎	〃	加工綿布
市川覺蔵	大伝馬町	絹布毛織
一浦弥一郎	〃	京呉服
大前龍太郎	〃	中形裏地
瀧富太郎	〃	織物
辻義三郎	〃	関東織物
中井長兵衛	〃	京呉服
北村謙蔵	〃	モスリン
宮崎庄太郎	〃	広巾織物
大前増造	富沢町	綿布
大辻松吉	〃	〃
大前捨次郎	〃	〃
小川源兵衛	〃	越後織物
岡島久七	〃	八王子織物
河窪二郎八	〃	関東織物
桂田伝次郎	〃	モスリン
神野清五郎	〃	各種織物
吉田哲二郎	〃	京呉服
横田禎之	〃	モスリン
瀧與三吉	〃	呉服
竹脇勇次郎	〃	関東織物
塚本三蔵	〃	綿布
黄地庄七	〃	綿布裏地
清水新治郎	〃	絹
辻吉三郎	〃	綿布越後織
西村與兵衛	富沢町	洋反物
中川平七	〃	各種織物
中川與惣太郎	〃	京呉服
苗村恒介	〃	染呉服
村田茂七	〃	洋反物
黒部八郎	〃	京呉服
桑原喜一郎	〃	中形裏地
八木増次郎	〃	モスリン
深田與三兵衛	〃	京呉服
小泉重之助	〃	呉服
小杉幸次郎	〃	三河織物
山本與惣吉	小伝馬町	綿布
市田繁蔵	久松町	呉服
大林庄内	〃	加工綿布
大岡信三郎	〃	小幅綿布
大橋三郎	〃	織物
川原崎増造	〃	綿布
安居佐一	〃	木綿
岩佐捨蔵	芳町	生地綿布
猪田喜三郎	橘町	綿布
奥田徳三郎	蠣殻町	呉服
川崎重蔵	〃	呉服
瀧停三	浜町	綿布
高橋長三	村松町	中形裏地
河村道之助	人形町	京呉服
村田東洋児	芳町	白生地

『紡織問屋要鑑』より抽出作成，抽出方法は本文参照，町名は昭和7年改正による

丹念に作成した「滋賀県出身呉服・織物卸業者一覧」がある。[8] 確かにそれはこの界隈の織物問屋街形成史の重要な特徴といえるであろう。本稿でも筆者の視点から創業者または開業者の中の該当問屋の近江系を改めて抽出してみると，表8のように79店にのぼる。松井清氏ではないが，堀留町・富沢町はまさに同郷同業の町である。しかも，その中には表3－a，bにかかげた同郷の主家から枝分れした多くの店があったことを指摘しておかねばなるまい。

それでは，こうして絶え間なく群生し続けたこの界隈の織物問屋は，どのような規模のものが多かっただろうか。この『紡織問屋要鑑』から筆者が抽出した240店のうち，年商と店員数がわかっている229店について，年商100万円以上をA，50万～99万円をB，30万～49万円をC，10万～29万

8)　松井清「同業者町の社会的構成」（『明治学院大学論叢』52・3号）及び「同郷者集団としての同業者町」（同誌58号，62.3，64号），「滋賀県出身呉服・織物卸業者一覧」（同誌61号）。

表 9　界隈の織物問屋年商200万円以上25店

店（主）名	店所在地	扱い品	売上高	店員数
1　市田弥三郎	堀留町	織物	1500万円	280人
2　瀧富太郎	大伝馬町	〃	600	100
3　白石甚兵衛	堀留町	モスリン	500	50
4　杉村友三郎	〃	〃	475	54
5　外山弥助	富沢町	各種織物	400	85
6　小林吟右衛門(丁吟)	堀留町	各種綿布	350	60
7　藤井彦四郎	〃	絹毛糸紡	350	35
8　山本元三郎	〃	綿布	350	30
9　村田茂七	〃	洋反物	300	80
10　小泉重之助	〃	呉服	300	70
11　斎藤嘉吉	〃	モスリン	300	50
12　神野清五郎	富沢町	各種織物	300	68
13　岩崎次三郎(近与)	〃	洋反物	300	65
14　吉野藤作	堀留町	関東呉服	300	70
15　西村與兵衛	富沢町	洋反物	300	65
16　田中新左衛門(田源)	堀留町	京呉服	280	60
17　荒居庄三郎	〃	関東織物	230	30
18　大久保久七	富沢町	綿布銘仙	200	36
19　瀧川忠次郎	久松町	金巾朱子	200	17
20　中川平七	富沢町	各種織物	200	35
21　中彬擧蔵	堀留町	モスリン	200	15
22　青山末吉	〃	関東織物	200	40
23　青木五兵衛	〃	モスリン	200	17
24　澤井藤助	〃	〃	200	45
25　渡辺郁二	富沢町	京呉服	200	100

円をD，9万円以下をEというランクに分けてみると，Aは50店，Bは36店，Cは37店，Dは94店，Eは12店で，ほぼ半数がDとEランクの店であった。しかも，Cランクでも30万円の年商の店が多いことからも，問屋の数はたとえ240店近くあっても，かなり小さな店が多かったといえよう。これに対して，Aランクはなかなかの大店である。年商100万円以上の50店のうちでも200万円以上は表9のようである。そこでのずばぬけた大店は市田で年商1,500万円，店員280人であったが，続いて600万円の瀧富太郎店の名がある。この瀧富太郎は表3－aで記したように明治後期に躍進途上にあった中川平七商店に勤め，明治45年に独立した店であった[9]。いわば，大正初期に開店して，織物業界の黄金時代の波に乗って成長した店の1つである。ただ，この表には，主家より独立し，主家と共にこのランクに入るほどになり，なかには主家を凌ぐ大店になったものもある。表のNo.1の市田からの神野清五郎店（No.12），No.16の田源からの中川平七店（No.20），No.6の丁吟から

9)　同店については瀧富太郎『自伝風雪七十年』。

表10　開店年次期と売上規模別店数

規模ランク / 開店年次期	A	B	C	D	E	計
明治以前	7	0	0	3	1	11
明治元～20年	8	2	1	7	0	18
20～30	5	1	2	1	0	9
30～45	7	2	1	7	0	17
大正元～9年	3	3	5	17	4	32
10～12	3	4	3	17	1	28
13～14	1	6	3	8	0	18
小計	34	18	15	60	6	133
%	25.5	13.5	11.2	45.1	4.5	100
昭和元～10年	3	4	7	15	3	32
%	9.3	12.5	21.8	46.8	9.3	100
合計	37	22	22	75	9	165
%	22.4	13.3	13.3	45.4	4.8	100

の杉村友三郎（甚兵衛）店（No.4），No.13の近与からの中彬擧蔵（No.21）などがそれである。そして，このランクに入る大店の中で13店もが近江出身店であった。また，業種的にみて，京呉服の他方で，モスリンや洋反物を取扱う問屋が8店，このランクに入っているのも注目に値いしよう。

それでは，こうした売上規模からみた店の数を開店年次別にみると，どんな特徴があったであろうか。売上高と開店年次のわかっている165店についてみると，表10のようである。

すでに述べたように，昭和10年現在からみて，ほぼ半数が年商30万円以下のD・Eランクの小規模な店であるが，この表10をみると，その大半は大正期から昭和に開店したもので，いわば，大正期の黄金時代に群生したものの多くは，こうした店だったといえる。これに対して，100万円以上の売上をもつAランクの店の多くは明治期あるいはそれ以前のものであった。昭和10年37店のAランクのうち27店はこうした時期の店である。しかし，大正10年以降から昭和10年までに開店したもののAランクの店をみると，その多くは東京支店である。大正10～12年の3店のうち2店は，京呉服の渡辺郁二東京店開設（大正12年），広巾綿布の渡辺洋行東京店であり，大正13～14年の1店も栃木の広巾綿布奥沢茂三郎の東京出張所であった。昭和に入ってから開店したAランクも，大阪を本店とする稲西合名の東京店だし，また秩父を本店とする柿原亀吉の東京店である。いわば，大正10年から昭和にかけての業界のきびしい状況下で開店し，Aランクに入る大店になったのは，こうした京・大阪，それに栃木・秩父のような織物産地からの東京出店のものであった。実はこれはこの界隈における織物問屋街の変貌の一端を示すものに過ぎなかった。そこには明治末期から顕在化した織物問屋の基盤の変化が進行していたのであった。

3. 織物問屋と生産会社

いうまでもなく，織物は圧倒的に関西の生産に依存していた。明治43年の生産状況をみると，絹織物の中で紋織は京都が63.7%で，愛知・岐阜を入れると81.4%に達していたし，羽二重は福井だけで47.2%，これに石川21.5%，富山・岐阜・京都・大阪・愛知の8.1%を加えると，関西だけで76.8%，縮緬は京都が48.2%，岐阜が13.4%，滋賀が同じく13%で，合計して関西が74.6%を占めている。綿織物は最も需要の多い大衆品だが，白木綿は愛知27.0%，三重が21.9%，大阪18.7%で，これに和歌山・愛媛・奈良・兵庫を入れると76.8%であったし，絣木綿は福岡・愛媛・奈良・広島・愛知で88%に達する。[10)]

これに対し，関東では，絹織物類の糸織が米沢地方・八王子・桐生・足利を産地とし，紬や太織は，銘仙は秩父・伊勢崎，縞紬は結城・栃尾・八丈・大島などが主で，二子・縞が非常によく，[11)] これまでの国産の綿布と比較して美しさと値段の安さで優れ，しかも遠く欧州に注文しても見本と少しも異ならず，細い長い糸で織った地合の丈夫さは，国産の及ぶべくもなかったといわれる。もちろん，この輸入は一時停滞したが，更に色金巾・緋金巾などの需要も増大して，これを含めた金巾の輸入額は逐年増加していった。これはまさに国産品綿布にとって脅威であったことはいうまでもない。明治12年の大阪商法会議所の調査によると，生金巾の品質は，下級品は泉州木綿と，中級品は伯州木綿と，また小幅ものは眞岡木綿に匹敵したが，値段となると，輸入品の方が遥かに安かったし，[12)] 特に高番手綿糸紡出の未熟さにより，直接競争できなかったといえる。また輸入された綿織物は，更紗・綾木綿・寒冷沙・繻子・ビロード・天竺布など多種類に及んだ。更紗は縮緬に代用され，婦人下着，帯，小児衣に，小紋は男の下着や羽織裏その他，風呂敷，座蒲団などに用いられ，大衆消費市場の拡大にともない，その輸入量は増加していった。

こうした事態の中で，金巾の商いは大きな利益を生んだ。これを早くも扱い大店に成長したのがこの界隈の金巾木綿問屋薩摩治兵衛と前川太郎兵衛である。殊に丁字屋薩摩治兵衛店は明治32年東京の主要織物問屋100店のうち，売上では第1にランキングされ，その出身地の近江では「希代の豪商」と評されるに至る。[13)] しかし，周知のように，綿紡績国産化も，明治12年大阪紡績会社の創立を契機に次第に加速化されてゆく。この経緯については日本紡績業発達史としてもはや詳述の余地はないが，問題はこうした動向に，この界隈の綿布問屋，特に上述の金巾問屋がどう参画していったかである。金巾問屋からすれば，前述のように，輸入引取商としての地位により十分な商いの利

10) いずれも『大日本産業総覧』の明治43年の生産額による。
11) 田村栄太郎『日本職人技術文化史』p.444。
12) 『横浜市史』第3巻，p.244。
13) 藤川助之編『滋賀県豊郷村史』。

表11　東京・綿紡績会社主要株主（織物問屋関係）

	東京紡（明治31年現在）	
社長	田村　利七	元三井銀行横浜支店長
	平沼　専蔵	横浜銀行頭取
	長谷川治郎兵衛	大伝馬町木綿問屋
	小津清左衛門	〃　〃
	小津出店田中国吉	〃　〃
	長井九郎左衛門出店家城良三郎	〃　〃
	長井九郎左衛門出店中条与惣松	〃　〃
	川喜田久太夫出店宮野弁次郎	〃　〃
	小津清左衛門出店土屋彦平	〃　〃
	日比谷平左衛門	和洋糸問屋
	佐藤清右衛門	盛岡銀行重役
	前川太郎兵衛	金巾木綿問屋
	鹿島卯之助	鹿島万平長男
	東京瓦斯紡（明治39年現在）	
社長	前川太郎兵衛	金巾木綿問屋
	日比谷平左衛門	和洋糸問屋
	木村利右衛門	洋織物引取商
	平沼　専蔵	横浜銀行頭取
	北岡文兵衛	旧三井家重役
	村井　眞雄	村井銀行重役
	西村與兵衛	洋反物問屋
	柿沼　谷蔵	和洋糸問屋
	東京キャリコ（大正２年現代）	
社長	杉村甚兵衛	洋反物問屋
	堀越　角次郎	〃
	薩摩　治兵衛	〃
	青木五兵衛	〃
	堀越　勘治	〃
	西村　與兵衛	〃
	白石　甚兵衛	〃
	斎藤　嘉吉	〃
	山崎　作次郎	〃
	藤野　茂八	〃

資料：各社株主名簿による。職業は著者調べ。白石孝「明治期の洋反物輸入と東京織物問屋」

を得ているのに，これが大量に生産されるようなことは必ずしも望むべきことではなかったかも知れない。とはいえ，こうした時代の趨勢を傍観することは得策ではないし，その販売ルートを確保する要は十分ある。他方，紡績会社の設立にあたっては，メーカー側は，大量生産の綿糸布の販売ルートを確保する必要があるのはいうまでもない。こうしたことが端的に現われているのが明治12年の大阪紡績会社の設立であろう。これは第一国立銀行頭取の渋沢栄一の設立によるものだが，これに糸問屋の柿沼谷蔵の仲介により前述の金巾問屋の大店，薩摩治兵衛もその出資者の一人となり，発起人に名を連ねていたからである。事実，渋沢のねらいは，「一流の綿糸商に会社の信用を認めさせることと，製品の販路を確保するところにあった」といわれる。[14] そして，これから以後，続々と紡績会社が設立される。しかし，その多くは阪神地区であり，明治22年から32年までの10年間に設立された工場をみると，関東８に対し，東海が11，京阪神34を数えるのであった。[15] 東京系といわれるのは，鐘渕紡，東京紡，富士紡，東京瓦斯紡であった。表11はこの東京系の綿紡績会社について，その株主をかかげたものである。この中で，「東京紡」は表のように大伝馬町の古くからの木綿問屋が株主として名を連ねており，明治期に開店した堀留町辺りの問屋は，わずかに前川太郎兵衛（近太）ぐらいなものである。一方，明治39年に設立された東京キャラコ製織会社には，本稿で

14）「岡村勝正談活」（『渋沢栄一伝記資料』第10巻）pp.13-14。
15）山口和雄編『日本産業金融史研究』東大出版会 p.34。

これまで取り上げてきた界隈の織物問屋が出資し，会長には杉村甚兵衛（新材木町），専務に堀越勘治（通旅籠町）と青木五兵衛（田所町）が就任して，直接経営をするなど，生産会社へのかかわり方を異にしているといえる。[16)]

この綿織物金巾と共に，明治期における重要な輸入織物は，筆者が度々取り上げてきたモスリンという薄手の毛織物であった。周知のように，わが国の織物は絹・麻布・木綿であって毛織は輸入品として珍重され，当初はそれは無地染めで緋色や紫色などが主であったが，明治になり鮮麗な模様を製出したモスリンの輸入は，「舶来モスリン」としてもてはやされるようになっていた。しかし，それは洋反物問屋の市場創造の努力によるものといってよい。そして，問屋はこれに国内での友禅染めを工夫する。この界隈の織物問屋杉村甚兵衛もその先駆者の一人であった。しかし，成功したのは大阪で，遂に日本独特のモスリン友禅が実現するに至る。明治20年代は，輸入も加工モスリンから生地モスリンに変り，新しい発展段階へと移行した時期であった。問屋は外商から生地モスリンを買い入れ，それぞれの独特の意匠で染めて販売した。友禅モスリンは長襦袢，帯地，夜具地，風呂敷，琴かけ，鏡かけといった用途に拡大し，着尺モスリンは点と線をもって描き出し，大島やセル，銘仙のような趣の高級なイメージをもって，大正期にかけて流行をみるようになる。無地の色モスリンは夜具地，裏地，八掛，袖，幕地などに使用され，明治30年代にはモスリンは「やわらかな手ざわりと柄染めの美しさから一躍明治の寵児となった」。[17)]

しかし，染加工では，このように友禅染めができるようになったが，色無地の方はなかなか進捗せず，輸入品が依然として市場を交配していた。そのため，輸入が国内の市況とタイミングが合わず，明治22年などはこうした原因による価格の大暴落をみることもあった。モスリンの生地の国産化はこれによりこの界隈の洋反物問屋の手によって進められる。明治28年における「東京モスリン紡織」がこれである。これはすでに述べた綿紡績とは異なり，明治20年代の不況対策に団結した問屋がこぞって出資し，この設立に参加したのであった。表12は同社設立時の大株主であり，また5年後の明治35年に三井銀行が出資を引き上げたとき，いかに杉村甚兵衛を筆頭にこの界隈の洋反物問屋がこれを支えたかを示すものにほかならない。以後，各地でモスリンの織物工場が設立されてゆく。表13は明治42年における東京のモスリン織物工場である。東京モスリン紡織，東洋モスリン，松井モスリン紡織のような比較的規模の大きなものから小工場までが明治36年以降続々と創立される。もちろん，大阪にもモスリン会社が設立されるが，関西はむしろ生地を輸入したり，東京方面から送られたりし，これに独特の意匠で友禅染めを行うのを特徴としていた。事実，東京と大阪のモスリン染工場をみると表14のようである。染はやはり大阪といってよい。この点も生産会社が関西に多い綿紡績とは対照的であった。

そこで，改めて，このモスリンを綿織物（金巾）と商品上の性質を比較してみると，第1は綿織

16)　白石孝「明治期の洋反物輸入と東京織物問屋」（『慶應経営論集』14-1）。
17)　政治経済研究所編『日本羊毛工業史』p.23。

表12　東京モスリン紡織株式会社主要株主（150株以上）

A 明治30年6月30日			B 明治35年11月25日		
氏名	株数	職業	氏名	株数	職業
三井．高保	5,000	三井銀行総長	杉村甚兵衛	6,000	前出
杉村甚兵衛	2,500	新材木町 洋反物問屋	武井源三郎	2,000	堀越角次郎後見人
堀越角次郎	2,000	通旅籠町 洋反物問屋	端　善次郎	1,230	三井物産退職
西村與兵衛	750	長谷川町 洋反物問屋	杉村理三郎	784	杉村甚兵衛弟
大浜忠三郎	750	横浜・田所町 洋反物問屋	西村與兵衛	750	前出
井上市兵衛	654	富沢町 洋反物問屋	大浜忠三郎	750	前出
川崎作次郎	625	田所町 洋反物問屋	井上市兵衛	677	前出
斎藤　嘉吉	625	新大阪 洋反物問屋	山崎作次郎	625	前出
白石甚兵衛	500	新乗物町 洋反物問屋	斎藤　嘉吉	625	前出
竹内房次郎	365	長谷川町 洋反物問屋	白石甚兵衛	500	前出
坂本金之助	325	長谷川町 洋反物問屋	堀越　勘治	350	前出
藤野　茂八	300	通旅籠町 洋反物問屋	坂本金之助	325	前出
端　善次郎	200	三井物産出向	茂木延次郎	250	浅草旅籠町 ?
杉村彦右衛門	200	蠣殻町 杉村甚兵衛義兄	藤野　常七	245	藤野茂人後見人
山崎勝三郎	181	久松町 ?	横田　久吉	220	前出
堀越文右衛門	150	群馬 堀越宗家	杉村彦右衛門	200	前出
堀越　勘治	150	通旅籠町 洋反物問屋	山崎勝三郎	181	前出
中上川彦次郎	150	三井銀行副長	青木五兵衛	162	田所町 洋反物問屋
益田　　孝	150	三井物産社長	堀越文右衛門	150	前出
			益田　　孝	150	前出
			平塚喜兵衛	150	芝佐久間町 ?

資料：東京モスリン紡織年度報告・職業は著者調べ
　　拙著『日本橋堀留・東京織物問屋史考』p.125

表13　モスリン織物工場　明治期（明治42年『農商務省工場通覧』より）

	工場名	製品	所在地	工場主	創業	職工 男	職工 女
1	稲吉工場	モスリン	小石川	稲吉長作	29.1	5人	15人
2	東京モスリン紡織(株)	〃	葛飾	代表杉村甚兵衛	29.1	269	3086
3	恵美壽工場	〃	本所	由井哲三	32	15	3
4	加藤工場	〃	〃	加藤越次郎	36.2	2	23
5	宇田川モスリン工場	モスリン綿織物	深川	宇田川清兵衛	〃	—	148
6	栗原織物工場(押上)	モスリン	本所	栗原イネ	〃	3	32
7	〃　(若宮)	〃	〃	〃　和市	37	1	29
8	大野機業工場	モスリン・風呂敷	浅草	大野由三	38.7	—	11
9	(合資)押上機業工場	モスリン毛織物	本所	—	39.6	—	85
10	東洋モスリン(株)	モスリン	〃	—	40.1	179	1119
11	風間工場	モスリン生地	下谷	風間まき	40.2	2	23
12	松井モスリン紡織(株)	モスリン・ネル	本所	—	〃 〃	17	996
13	二宮織物工場	モスリン	深川	二宮隆太郎	〃 4	—	34
14	田端工場	〃	瀧野川	板倉平吉	〃 5	15	132
15	天野工場	〃	下谷	天野その	〃 7	—	30
16	田岡工場	〃	南千住	田岡豊蔵	〃 11	1	65

物と違って混紡されず，意匠がものをいう商品で，それだけに市場はマスマーケットではなく分割市場であること，第2は，このモスリンは和装用として商品化され普及しており，綿織物のように輸出されることも少ない，いわば国内志向型商品である。製織工程も単純であるため，簡単に市場参加ができるので，好況のときは生産過剰になり易く，不況期には輸出ドライブがかからないために，市況の崩落を招く傾向が強いものであった。[18] これらは，この界隈の綿布金巾問屋とモスリン問屋の経営に大きな違いをもたらすものであったことはいうまでもない。

それでは問屋と生産者とはどのような取引が行われたのであろうか。もちろん，生産会社とは特約店契約を結ぶ。表15はモスリン生産会社の東京・大阪の特約問屋名である。この表の下欄の栗原紡織（後の大同毛織）の場合をみると，それは「モスリン仲間八家」とよばれる杉村甚兵衛・青木五兵衛（山五）・西村與兵衛（近与）・白石甚兵衛（角石）・斉藤嘉吉（金久）・山崎作次郎（三作）・大浜支店（山久）・島田利右衛門（大利）であり，また一方では明治44年頃より大阪方面の販売を開拓し，伊藤万・山口玄洞・岡島・千草・的場などの有力商品と取引を行うに至る。[19]

木綿は埼玉・静岡が筆頭に上る。しかし，東京が生産で他の地域に対して群を抜いていたのは毛織物の一種のモスリンであった。それは全国産出高の75.8%も占めていたからである。

もっとも，明治・大正期の織物は激動の時代といってよかった。なかでも綿織物の「晒し金巾」

18)　白石孝「輸入代替工業化の史的事例研究――明治・大正期のモスリン産業」（『駿河台経済論集』5－2）p.411-414。
19)　大同毛織資料室『糸ひとすじ』pp.179-181。

表14　モスリン染工場東京・大阪（明治32年までの創立工場名）

	工場名	代表名	創立年月	明治42年従業者数	住所
			明治	人	
東京	谷岡寺島工場	谷岡　兼蔵	5.1	41	南葛飾，寺島村
	〃染工場	〃	16.9	54	本所，向島
	矢作西洋染物工場	矢作金次郎	7.3	6	〃　林
	東縮緬工場	川口　永治	28.9	65	〃　向島
	中山工場	中山　専三	28.11	58	〃　柳島
	荻原友禅工場	荻原　国三	29.3	17	南葛飾，柳島
	馬場染工場	馬場金次郎	29.5	15	〃　亀戸
	森田友禅工場	森田常次郎	32.5	36	〃　大木村
大阪	奥村友仙工場	奥村源次郎	12.1	22	北区下福島
	田村友仙工場	田村駒次郎	19.2	55	西成，豊崎
	島村友仙工場	島村徳兵衛	19.5	32	南区難波之町
	保田友仙工場	保田宗弥太	22.9	34	北区下福島
	安本モスリン友仙工場	安本庄兵衛	24.7	60	南区難波西
	天満染工場	桑原　政	27.7	47	北区天満橋筋
	植村工場	植村　宗七	27.7	18	南区難波東
	河瀬染工場	浅田太一郎	27.11	64	西成，豊崎
	山本友仙製造所	山本　象吉	29.4	36	北区福島中
	武田友仙工場	武田眞次郎	29.6	26	〃　下福島
	平野工場	平野　梅吉	29.8	40	西成，鷺州
	川島友仙工場	川島　直七	29.10	30	北区下福島
	黒川友仙工場	黒川　てる	30.6	8	〃　堂島
	森工場	森　佐久造	30.6	51	〃　同心
	平野友仙染工場	平野洋次郎	31.10	35	〃　西野田
	榎並友仙工場	榎並利兵衛	32.4	8	四区立売堀
	平井毛斯綸友仙工場	平井岩太郎	32.11	42	西成，豊崎

農商務省『工場通覧』明治42年より作成

とモスリンの輸入は，織物業界に大きな衝撃を与えるものであった。「金巾」は「白く地合が美しく，糊つやに光があって，染はこうしてみると，東京のモスリン会社は，その特約問屋を東京のみならず大阪にも数店持ち，大正の８～９年の黄金時代にかけて，この販路を拡大したように思える。しかし，神戸の日本毛織や大阪の毛斯綸紡織は，地元の大阪に特約店を集中していた点で，これもまた対照的というべきであろう。

すでに述べたように，大正９～10年の反動不況に続いての大正12年の関東大震災は，東京の織物問屋に致命的な打撃を与えた。金巾の広幅綿布を製出していた城東・葛飾の工場を始め，東京モスリン紡織の吾繻工場，東洋モスリンの亀戸工場はいずれも倒潰し，栗原紡織工場は全焼した。これを機に，多くのこの界隈の織物問屋は苦境に陥り，新旧交替が激しくおこったことはすでに述べた通りである。しかし，ここで注目されるのは，大阪の織物問屋の急速な東京進出にほかならない。

表15　モスリン会社の特約問屋

モスリン会社	特　約　店	
	東　　京	大　　阪
東京モスリン紡績	青木商店・斎藤嘉商店 藤野商店・堀越商店 杉村商店・細田合名 白石商店・西村商店 村田商店	伊藤萬商店・寺庄商店 伊藤新商店・高岡商店 長島商店
東洋モスリン	中杉商店・藤野商店 杉村商店・西村商店	木谷商店・小松佐商店 芝川商店・山作商店 田村駒商店・寺庄商店 田村亀商店・杉徳商店 丸江商店・山口商店 高橋商店
日本毛織（神戸）	斉藤嘉商店	伊藤萬商店・丸江商店 田村駒商店・山口商店 高岡商店・高橋商店 杉徳商店・河崎経吉商店 芝川商店
毛斯綸紡織（大阪）	ナシ	略
栗原紡織	杉村商店他（本文参照）	略（本文参照）

『日本染織工業発達史』p.58,『糸ひとすじ』pp.179-181

以前より，大阪の問屋が東京に商品を出荷するのは「江戸積み」といって，一流問屋として評価され[20]，ごく限られた店だけであった。小西長左衛門，稲田喜作，岡島千代造，堀川新三郎などの店がそれであった[21]。もちろん，多くの大阪の問屋が東京に進出を企てたが，これは決して容易ではなかったという。それは東京の委託販売制度が問屋に不利な条件が多かったり，北海道では大阪商品は東京商品に劣り，名古屋以東の洋反物は殆どが東京商品で占め，奥羽地方では各商品とも，大阪商品に馴染みがなかったためとも[22]，また東京の好みにあわず，「東京の問屋は商品を買うより人物や人柄を買う傾向が強い」といった風習によるとみられていた[23]。

しかし，震災後，多くの大阪の問屋が東京に進出し得たのは，東京の壊滅により商品供給が途絶したことはいうまでもないが，むしろ生産会社がその販売先として積極的に大阪の問屋に取引を求

20）『伊藤万100年史』p.6，及び梅沢昇「近代大阪における繊維商社の発展」（宮本又次『大阪の研究』p.230。）
21）前掲『伊藤万100年史』p.7。
22）梅沢昇，前掲書 p.250。
23）『中嶋弘産業株式会社回顧75年』p.63。

めたことにあった。それは改めて大阪問屋を再認識した結果でもあったといえる。当時を顧みて栗原紡績は，(1)大阪がモスリンの取引量が大きく集散地としての条件がよいこと，(2)染織工芸の歴史から意匠図案が発達し，特にモスリン友禅の源泉地で，模様染めはやはり大阪であること，(3)この染色工場に問屋が積極的に資本投入して育てていること，(4)資金的に東京より強力で，不況のときでも常に大量の取引をしてくれる上得意であることなどをかかげている。[24)]

もっとも，この界隈の織物問屋街には，この大阪のみならず，数多くの京都からの支店があったことはいうまでもない。そして，この街並みには，すでに記したように，秩父，高崎，栃木，八王子，福井，米沢といった産地からの東京出店がめだつようになる。それもまたこの界隈の織物問屋街がもっている史的特徴といえるのではあるまいか。と同時にそれは明治末期にすでにみられた変貌の顕在化の一端を示すものでもあった。

24)　前掲『糸ひとすじ』pp.493-494。